

慶長見聞書

御家

庫	文	閣	内
一五〇函	三三二四	五冊	和書類

第三

内閣文庫		186
番號	和	33124
冊數	5	(3)
函號	150	65

ありし



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

發賣子因信

江戸河内守長



松平因晴

石川日向

松平備後

友江誠

源信忠

西凡、百文、代、楮、沙、度、公、天、智、三、景、康、景

子、其、の、康、景、の、心、志、を、志、し、て、其、の、大、業、を、進、め、し、め、ん

小田原城

無清手大久保相換

沼津城

城之 守内中村泰吉

三ヶ丘 龜山城主也
龜山ヲ明テ清手

清之 田坂之左衛門

駿府城

城之 中村或親少輔

志願ヨリニ同寺城ニヤ
之同寺ヲ明テ清手

清之 菅沼忠房

忍川城

城之 山内對馬守

清之 松平隠波

城之 堀尾信濃守

濱松城

仰合我以後肥後守
類前北ノ庄ヲ守ル

清之 保科肥後守

横濱城

城之 有馬主善殿

其後惣兵衛山ヲ守ル

清之 三宅惣太衛門

吉田城

城之 同 筑後守

其後京名ヲ守ル

城之 伏田之左衛門

周清城

清之 松平如泉守

其後京名ヲ守ル

城之 岡守西助少輔

其後京名ヲ守ル

清之 小糸貞吉守

西尾城

丹波城

淡河城

其後主藩大山守

城之 田中兵部大輔

番之 松平左衛門

城之 水野和泉守

番之 母之

城之 福智左衛門

番之 石川左衛門

同 松平左衛門

毛呂城

番之 松平又七

同 小三系新九郎

同 安藤守

同 子賀孫之丞

同 日守守

大野守 子向守

同 清水守

同 守

と別言塔城

青子 近衛小太郎

中納言掾に借ると曰ふし其得た印意より

其後の書より其意に合致は後と同一の所書法

内府掾に又子江戸の所立の如しお同

流り申儀に指さう曰後古大馬の百人組に伊奈

馬書に長柄奉行の平右衛門助古大馬をな馬

所旗目下記古大馬の成流古大馬の二百人組に

服了石見守所先より其物成七系柳系

小系より小九助服了中後勅命也此る

中納言掾の字故云々中山道河通より

所とて内府掾に江戸に改め江戸に

其の意より其の以後の所書物成り

其の中納言掾に借りて百人組に

服了石見守の伊賀組の頭より百人同心

をまうらふ其組根に因り内膳と一系

伊奈馬書流りて其の内府掾に依り

口供より俄に死にかけりる二百七の書物と指
くはれし人三人ありて服と履は在
此人ハ山坂系高し區窪田物之區同友志中村
友志右坂友志志村又友志系下村山坂孫志
河野傳志志やけ陣れの後ハ書物ハ
口と指し供するは

一 同府公小山よしとて攻とて成り行定し時
三河を度いり故まじ成り中河を度中河道

口攻と同府公ハ東海ととり下りあさきい時
小宮ハ中河道中一の難ありしと度し言とて
より右河代官ありて敵攻めをえり居り
中河を度いり前のめりて攻め
この口供とて同府攻め意ハ小宮ハ中河
難ありしと成りあるハ小宮中河とて
志くを列れしものよつ按と起し
る事ハ安ら

予に尋ねたるが如くは江村可成といふこと。如くは予
佐助といふは予に尋ねたるが如くは予といふこと。男といひ
申したるは予の申したるは予に尋ねたるが如くは予といふこと。大
河使や予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予といふこと。予
友人を召かされしを可成に尋ねたるが如くは予といふこと。予
召かされし友人を召かされしを可成に尋ねたるが如くは予といふこと。予
教多ねんといふこと。予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予といふこと。予
予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予といふこと。予

久後百姓を召かされしを可成に尋ねたるが如くは予といふこと。予
予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予といふこと。予
予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予といふこと。予
予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予といふこと。予
予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予といふこと。予
予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予といふこと。予
予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予といふこと。予
予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予といふこと。予
予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予に尋ねたるが如くは予といふこと。予

一揆と起らせと云ふ元迄拂ふ所打たぬ事
のり取らぬと書て廿多法儀と云々と書判形を
すし茅村めと判形せしとす茅村より
は多と云して四かあふり用めて判とす
下よりいさゝかさへは偽と云ふと
りら村版を何ら定らるる一若あると
生してとあるは後より偽と人のりさ
く多しとあるは味方と云ふとあるは
ひらゝ判をすし偽と云ふと云
るは判形をいへて封して偽
と云へば後よりは河陣へ系
指しつは河府松村外
毎人のそれと云ふは
初日の夜と云ふは
去り後めくふと云ふは
未だは決地を放し攻
むるは案回の

ひらゝ判をすし偽と云ふと云
るは判形をいへて封して偽
と云へば後よりは河陣へ系
指しつは河府松村外
毎人のそれと云ふは
初日の夜と云ふは
去り後めくふと云ふは
未だは決地を放し攻
むるは案回の

とる勢あるに一日とあるに敗軍しける
と茅村山村ら場其外の本曾元年人
押つけく追打よしし首をとるに村
しよ女もしつら遠ぢらと述しける後
友人の本曾と下されもた

一 叔父は本曾千之帝の幼道なりしを
千之帝親父は九尾頭義昌なりし義仲より
千之帝の嫡流やし千之帝母は佐々くらしとあり

同府掾は佐長に討死し後義昌にありし
と後の中よして二万石なり千之帝其の跡を
けり此父本曾の孫也一内府公より
三万石なりしをその日にさしきりし
よと帝よりしと又此石を合カと此内府
天下一の石と持名をはずし中々諸人
是をす及人おを祇よ名譽なりし也
實は是ハ信長公の秘蔵のしりし也

我思ふはしめてこそお願ひけり子之節
童子は時に罷取ても返れなくも之節
是と信じてお願ひせられたるは
も返り之節取立物又の罷取を尋ね
し別子打成取と二人の家老を
内府様家人と云ふと云ふ成取と
り成取と云ふ子之節は伯父あり
我と知り合力するは家人同之を
監人

あつたはしるは若しるはし
し内門より乃ふ又子之節
と小生は密通しけりとして
あ人を我為愛
し牛さしきいふは若し
か取の之取の罪科は
ありしは公儀の
と左も若し一
よしめてお儀の
改易からしむるは
家人めて今後

とよきける

一 北条景勝押入

城邑、羽津友三郎
中郡、支城、お屋よ

三河守秀康孫三の凡小笠原右近三の凡里又安房守

一 黒羽、足利内膳服了石又同心二百人

一 水谷佐行の押入、湯掛、在陣元

水谷伊勢守
皆川山城守

一 布衣城松平守又佐野城佐野修理重

一 膳浦城植村重信守、前指平右、守平次

一 信城、晴朝公、守

山川、山川民部、下妻、女賀、修理、下飯、水谷、伊勢守

一 八月、日中、内、換、都、入、門、立、如、ち、山、也

左、田、助、入、心、か、つ、と、九、月、節、日、佐、別、佐、丹、保、伊、兵、衛、

同、二、信、次、小、室、心、定、又、女、守、心、津、又、守、在

伊、保、重、忠、心、是、心、同、安、房、守、兼、心、上、田、守、也

女、守、下、心、女、守、心、女、守、心、女、守、心、女、守、心、女、守、心、

女、守、心、女、守、心、女、守、心、女、守、心、女、守、心、女、守、心、

度々おる北のせめてもあはれ思ふに頼つて
心より同様の小室の心をもつてあつて
しあはげ度々おる同様の頃えは同様の
（いひ）えあつて人々もあつてた田は
いんとあつてあつてと田城よりとあつて防
りしあつてあつてあつてあつてあつてあつて
いんとあつてあつてあつてあつてあつてあつて
いんとあつてあつてあつてあつてあつてあつて
いんとあつてあつてあつてあつてあつてあつて

侍とおつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
同様のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
法をあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

期会友十戸向は辛やうり人をも市左衛門ハ
くらき船の毛れこから三三のたしあひしきり
もしいは歌あよあしけにかなふま切たけ
あやらのいしは成りしてはあ我のあ
吉田は常勝もいふらのいよひてさ
つめはけ久矣をいうけい向歌意射掛
ははれ御は子ぬし同六日本多決決
しよ六歌と味方れ大勢をいふりあ
あ

事よ成河府次のは陣をいふえをるのせえ
うぬ息も怒通つてはと事と柳系式記
あつてもははれあつてもははれあつても
若くとも進てしよ若殿は智の陣之
あせあぬ及ともあつてもははれあ
あつてもあつても河府探しあつてもははれあ
あつてもあつてもあつてもははれあ
あつてもあつてもあつてもははれあ
あつてもあつてもあつてもははれあ

不同同七目の意と同大の深なる年、嘗て
数とけぬ、敵大勢は海居山の牧野右馬允
同子是新の帝大の保相列子是如賀るに陣は
不し達おかけし、合ふ酒井同元は多
負流流つして押寄せり、今も旗ちより
流渡り下知ると河意と誓し軍を初筆
曲りしと辛しあつる敵はたよまおしよ旨
おしつけ大の保相列元牧野右馬允一書は

おしつけ進よ相列の母は、松浦忠重とよの
旗ちおめてし、左の一書は、右馬允をて、
少志押込えと一書の一書は、候へおしつる
と味方とまゆきしよる諸軍己のりよんと
えり如よむ多流渡り大よし、復書元をん
味方を引あけく、陣へ返り、城守より
鉄炮せく、あつる味方とえり、味方れ
大勢をえり、返りよ同、自友沼忠七を

と回れりしより押寄小曲端可攻よの家光
奥平内丸也御らり是ハ後江小大膳也又
其子貞次二男之後は子と云下は子孫傳言と
よ小因九小家ハ心故陣より毎日河邊取らり
爰まで又軍行定より中多依渡り御下知を
石得ぬけかけし一軍法を背よと云れ
切腹はし一の軍人右馬元四相換寺四
一書りけは、女人の切腹下付と云下依り
右るん子也新二席よハハ柄持者ハ切腹ハ
させし事口惜し一母し山急掃勢助をつまては
依る依渡り大いりたるんは其田おくれ
たふあ、しよよのし一は僕よハるもいふ
其後久安あつしよよつあそと又胡志と云後江戸
あつしよよは形よ立書れ極よ、おとろ小尾元
津合をよといよよ付けしよよあつし
一 大原相見れ子也かからりと松浦をつれと云

と回れりしより押寄小曲端可攻よの家光
奥平内丸也御らり是ハ後江小大膳也又
其子貞次二男之後は子と云下は子孫傳言と
よ小因九小家ハ心故陣より毎日河邊取らり
爰まで又軍行定より中多依渡り御下知を
石得ぬけかけし一軍法を背よと云れ
切腹はし一の軍人右馬元四相換寺四
一書りけは、女人の切腹下付と云下依り
右るん子也新二席よハハ柄持者ハ切腹ハ
させし事口惜し一母し山急掃勢助をつまては
依る依渡り大いりたるんは其田おくれ
たふあ、しよよのし一は僕よハるもいふ
其後久安あつしよよつあそと又胡志と云後江戸
あつしよよは形よ立書れ極よ、おとろ小尾元
津合をよといよよ付けしよよあつし
一 大原相見れ子也かからりと松浦をつれと云

下は用意したるを於浦まで送りし所を
難波河より我命をおくみ奉りし日
穿人いさせり我命を我命の老人命
るさあはは自命——けまはのちの
日府校するくも後のもう伊子も皆
らも中よりなる事な事功福をかき
あ——と諸人——のさあはは
一 叔中細言根小字の立る成る日よ長
奉りしに

河津をさすく道に敵攻められし所用
をぬけたるを
く押め同中しに概々系は河津をさす
河津をさすは河津をさすは河津をさす
河津をさすは河津をさすは河津をさす
河津をさすは河津をさすは河津をさす
河津をさすは河津をさすは河津をさす
河津をさすは河津をさすは河津をさす
河津をさすは河津をさすは河津をさす
河津をさすは河津をさすは河津をさす
河津をさすは河津をさすは河津をさす
河津をさすは河津をさすは河津をさす

序は流ア浦方 周治系 幸一の小塔
ておとひ建方まけ軍とて改系はと
皆く美又尸つとつ矢射きして改系い
りりおとひ中納言松原合名入心
時乃よりか照北山照より川を隔く
又中納言川端へか一後炮くせ
か又中納言通へかおるるるるるる
尸の同十八。可兒大寺の泊九の赤坂

の同廿日。宮内省。兼津の美濃内府
元治の連は心か下野り念心
くすくすしての美心おるるるるるる
のつくりと切きよるるるるるる
兵の其か御の元つきとととととと
是ての連よとととと中納言松原合名
の美新安合銀をかつり晴とあを
かきつて私安とつ美元皆とととと

あつたに所存の三葉かりし事ふそ、其國を
口攻り、或日たわくるとり、あつたに所存の
たつたに、なりしよ、つたに、あつたに、
しよ、あつたに、あつたに、あつたに、
あつたに、あつたに、あつたに、あつたに、
あつたに、あつたに、あつたに、あつたに、
あつたに、あつたに、あつたに、あつたに、

一 濃忍の口若村より、口若村中、勢を、口若村に
口若村より、口若村に、口若村に、口若村に、
口若村に、口若村に、口若村に、口若村に、
口若村に、口若村に、口若村に、口若村に、
口若村に、口若村に、口若村に、口若村に、

一 山崎、妻山、雅樂、助、取、り、攻、落、し、の、口、則
口若村に、妻山に、雅樂に、助に、取に、り、攻、落、し、の、口、則
口若村に、妻山に、雅樂に、助に、取に、り、攻、落、し、の、口、則
口若村に、妻山に、雅樂に、助に、取に、り、攻、落、し、の、口、則

一 九月十日、あつたに、あつたに、あつたに、あつたに、
あつたに、あつたに、あつたに、あつたに、
あつたに、あつたに、あつたに、あつたに、
あつたに、あつたに、あつたに、あつたに、
あつたに、あつたに、あつたに、あつたに、

東平の太田を遷りしる城、小智又沙登
の事あり、此等しるる尾より、以由る、
多野の事、相丹波、津佐、右京、西尾、備後
、真濃、元三子、女、押、ある、因、十日、又、越、せ、見
あり、大垣、れ、城、れ、知、居、れ、後、系、た、る、御、二、百、七、十、三
の二の凡ハ、然、言、内、尾、也、將、宗、た、事、負、た、火、守
二百七、十、三、の凡ハ、相、良、又、内、尾、の、事、を、秋、月
の、事、を、三、百、七、十、三、の、事、を、秋、月、の、事、を、秋、月、の、事、を、

い、ま、の、事、を、三、百、七、十、三、の、事、を、秋、月、の、事、を、秋、月、の、事、を、
事、の、事、を、水、野、見、の、事、を、秋、月、の、事、を、秋、月、の、事、を、
通、し、て、見、る、事、を、秋、月、の、事、を、秋、月、の、事、を、
り、や、り、し、る、事、を、秋、月、の、事、を、秋、月、の、事、を、
侍、ら、か、頃、安、堵、を、は、り、し、る、事、を、秋、月、の、事、を、秋、月、の、事、を、
唯、亦、死、し、し、る、事、を、秋、月、の、事、を、秋、月、の、事、を、
用、を、せ、よ、と、し、る、事、を、秋、月、の、事、を、秋、月、の、事、を、
事、を、三、百、七、十、三、の、事、を、秋、月、の、事、を、秋、月、の、事、を、

討取らば必お願申上りと誓紙なして
約束もくかは秋月相良を船をけよと
細得して取らひしころは通相調誓紙を
讀みて之態言實お村方の軍評定しす
事よと之お説しとて態言實のむとく
あるお村の少恩業しして之實と態言
をくりして又教の二人のやあらぬ
お村の女ふまへ成事とくく返を態言

實のまげの秋月交りてしくおらけ
お村方のお人とのおめりおのて
云きしける其後を打たれぬおのて
お村の船秋月三人を三人めて責言
お村の船は行み中人が残けるを
相良も船秋月を寄るし三人が討
川入子見傳言の討死父家た為の腹切を
よつて秋月三人の首をきてのらとけ

水野は萬人救を三ヶ所へ打入て廿九を攻
 らせしるより廿九の勢もや福原たる助
 二向み千人を千人ふくむり千人ふくむり
 足銃炮をしかけ（一）冒戦（二）しける尾河の寺
 中東一書誌し討死すの九水野もたきし
（三）本馬ゆり一傷もなかりし
 廿九の矢久を射入るは廿九は山邊也して
 廿九の勢もや廿九の事は廿九のこゝろに
 廿九の勢もや廿九の事は廿九のこゝろに

廿九の勢もや福原の合点せしことしるも家老は
 廿九の勢もや早し和後もしく西尾家老は廿九の
 廿九の勢もや請取福原の味を以て後ね城後れを
 廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや
 廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや
 廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや
 廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや
 廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや
 廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや
 廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや
 廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや
 廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや
 廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや

廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや
 廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや廿九の勢もや

一 吉田飛騨も長城の四将より先佐賀の國の
双れを言や飛騨も願念あれ、坂下人よ侍
百人がかの國を望みける中川修理長を
御給ふの陣あり、あや成るを言ひし
日、夜も悔れしと曰く後悔の相違あれ、
四将城をせらるるは是の國に系れ軍敷し
げらる十月三日と云ふより陣れ者も中川
平左衛門吉田忠常、山内重保、大系伴地

友房、又吉田下村平飛、大將にて今も存と云
ぬ、あまの佐賀の國を打拂ける坂下人を
正念寺より、後炮をせり合ける、あま
打ちして國を閉し、追ひる坂下も、強燒拂
り、岡三、吉田元忠、吉田忠常、橋本、佐賀と
云者、大將にて百餘人、陣をよよまし、
正念寺の陣を、あけ、法のあま、合戦を
中川、打負、右の七人、中川、大將、分の中川

平太馬つを初く六人討死し一葉を如美一人
源も負けるを家人引つけと震ふるり毎日
の暮しに返るを田舎と勝軍しして其日
岡村へ攻陣を中川の初き大友と味一の譜
なきしけるを田舎へ討死中川故の旗
のりりを添如くふるをこれ後附りつと
後悔し一残れたるをさしし事をして
すうこと一入替をか一か来よ侍討死

一四村(攻)あるまき事と一守り後(守)攻
はししけるを後勢あるしけるは同
如く押寄る巻く四村城と和佳く一城
後取ける

一會津中納言景勝 百石 石白川城

一法行方京も又義宣 六十石 常盤川
水戸城

一秋田城 六十石 秋田城

一 若城之節

十石 奥只若城

右之園東子石田也

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

世奥の戦も抗く

去程は會津の言景勝ハ奥列之野只ノ境白坂
より白川と名の草薙が系と合戦場ノ根道那
二三里なる竹木を切し待しけり又瑞穂城ノ中庭
とちねふしと申同き所也事と三竟て外穿人元
如か合元里乃内同將監負之書書 于時 申申
三河 少野伊豆 初号留切 永井乃取 派多志 志川
傳 東同太 佐喜山 刺之出 派多志 九席等 百餘
福徳城より一里半 志 派の と 志 志 志 志 志

より仙石の柳川の城は後田大炊助の勢、東丹波
又子とて白石城は其指波後城とてし、是れ
甥れ或る者、是れをけり、おとろよ、石田
仙見と攻め、一味をけり、け由通、くく、る、系、婿、
白の妻、河府の、女、向、を、待、け、け、依、行、村、田、と
一味、く、く、白、川、へ、出、法、く、一、番、人、を、我、女、回、と、恐、二、番
ハ、湯、津、下、女、大、将、よ、し、合、戦、初、め、ん、と、用、を、く、
け、く、家、康、は、と、と、ろ、く、の、女、向、を、よ、け、く、よ、や

を、い、山、城、を、く、増、よ、し、後、京、常、陸、介、春、日、右、兵、衛、
等、川、河、理、を、と、泉、二、よ、り、等、を、組、み、よ、し、一、万、二、百、人、
を、い、又、子、人、合、を、い、つ、つ、を、と、れ、山、形、一、番、回、軍、
を、り、常、陸、介、と、れ、山、台、より、を、く、れ、攻、め、よ、
と、行、き、く、け、く、の、女、よ、り、の、素、内、を、く、よ、
との山節道彦、一人、馬、通、治、自、由、成、り、敵、
方、大、勢、加、勢、よ、し、玉、藻、と、兵、糧、水、は、用、を、
く、く、又、山、形、道、二、情、を、長、谷、を、く、山、城、を、く、

戸小城にありしを移ししは筋に改め三日に
之申くは方人救押せし事事や
て油ひし如押せし事事や
頭美日古島に世師より押入の事其法は其易か
破せし故人をしりし事事や
昔言きしより人救ときし事事や
は由昔言きし日通の事事や城に里に
越後よりしりし後考美日古島よりしりし事事や

良久戸通の事事や
其後此は其事事や
河馬をよせし事事や
うらうら討死は其事事や
甘勢や其事事や
其後、其事事や
改を請し其事事や
是を以て物初能事事や

可成公城を後者後人を物産を以て
あつて城を以て城を以て城を以て
一連して公城を山城に城を山城に城を
る公として別和後の記事を以て人質
せんともて長尾城より左に居り
けしとて江城より身を以て記事のちや人質
る及公の意切れぬや、杉原常陸介の
大いなりこの方の城を以て

を以て行時を以て山城を以て山城を以て
攻落すは枝城、自落城を以て物となし由
いさなりとも惣大将を以て一節のちや
あつて城を以て城を以て城を以て
己の岩路に攻りぬ人殺しを以て城を以て
ま、城を以て城を以て城を以て
相城を甲とぬき、らつて城を以て城を以て
あつて城を以て城を以て城を以て

城は居ありしよりさき由下あたりにありしに
情名の城への壻を入りしに居れ城の入口
みよ東より者巻つては城の向ふに河川の
湖ありしはありしに下を圍めつけあや
あし浅涼の程なりとて物えしとの
十人斗を湖のへち入けしを敵とて見
あや五人斗の甲へち命くあやせり合ひ
又沼の五人斗物えしに來りしにあり合

お戦ひする城より大壻あし打あしとてあや
そりて一組れ頭と泉を伏を呼くは由を
相傳へ急いで向味をとりと居しに
うは泉取り物地斗あし七八段と向き
ちりて味をとりあけ氷をとり一河斗と
のきくるとつては法より大壻打く
お窟つけしかはよ泉と初物えしに
大方くは海も負荷しめて敗軍志けり

松原常陸介よりくる一徳の頭と泉斗か人教
よしてさうしよとある事ありあやまりあな
是系物又へはしり功者成よのと昔をふれ
里人と葉田若よつきて送れ下れ堤を二六
切落しつれ、其夜よ水ち方落して清く成
けさるあめより押寄せよ攻めぬる城甲
よ、昨日軍よ多村よ負よとけしこく
て二時余よ合戦、予二人付多きを大将れ

の口を初て切腹し弱兵落りけりるあま
腸よけつと責入ちとわけりる、言れ城
坂井の城よりけ旗をうん味方れ合軍の根煙
りや思ひいん大よつしめしよりこみ入密け
りるるあまのまは警の教くは成く敗軍よと
大誓あしきまら事あるハ下をよらあま
いさしり我志くは落たり敵ハまの利を
ちあめきさけしてあつげらるあま軍人

一ノカカアハ... 重々會津より
人教をまもりて攻めし志... なるい
其後より... 攻め白石城... 白石
攻め山縣... 攻め甲... 出撃...
油... 人教... 防戦...
一ノ城... 本指... 方... 信濃方
攻め白石を攻め... 攻め... 信濃
... 信濃... 白石... 信濃

... 討死... 甲... 攻め白石...
... 攻め白石... 白石...
... 攻め白石... 白石...
... 攻め白石... 白石...
... 攻め白石... 白石...
... 攻め白石... 白石...
... 攻め白石... 白石...
... 攻め白石... 白石...
... 攻め白石... 白石...
... 攻め白石... 白石...

留後清人のくも方田や登壇を喜ぶ新皇
負書山田と又ふ井をたつれをたす人
残るる政家敵の心持ありとて今月
のこゝろあつてあつたけし切てつり
軍人亦た向敵の戦つりも野原を
攻めし馬より突き落つれりも死
殺別を口打つ一人とあつて討つ退けり
景勝を感し後日田を越後と改名し

綿れり衣を脱りしとて軍人元福清
の如くは柵れあを振行末を名く其日
にまゝかて政家の瀬と敵と追散し
清清と敵の心とあつて柳川をたつれ
いあつてあつて余人相討し重長外陣を拂ひ
出陣を柳川の巻城しる車丹波とて
中園岩城れ白人とて年よりと場敵と武勇
人といふも久安園れ名將を尋らる

終りよあしきまじりてくはぬの功たよのし
後同大將よりくるに政宗は陣亦ゆるし
人をけしと申すに大いよきよのいひに政宗は
けし後清よりけしは方のまきよはけし
と申すに政宗は名將よと申すに政宗は
重寶のあはきと三春城の田村清顕加と
あつてはけ人くしき初よき大將の留まを
か留まよふとよきかかよ由ぬし

はるより人教をうけあまくれまとい合戦をうけ
まより合する隙に政宗は人けあまよ
きしけつこの陣をころり大とふけのけし
たらく無頼陣小なまよふてくるよは政宗は
達者よしに政宗はくしよるまのしす
後同を軍れ事ハ東友清きふきハ打ま
るのとして後同を大將ふて東丹波りよ
る膳をお果し政宗はあまの人数を定て

ひり殺別ぐり合ふ其るは功考の未共
百に人相志し斗を付志せむやう海軍
此陣を柳よせ鉄炮を打つけたるは其を
かけ切て入軍ふ侍七八十人御事致す合
防りれども其可女百人討死乃りてハ其物
もろりあつてもいりりあ村子大患に此れは海
軍の田をいりりいりりいりりいりりいりり
其か人の鐵馬鞍をもとれりて抑川へ海り

政宗より柳川へ抑川へ其の勢を是れ致す
敵より引退けし政宗を是れハ其の事として
引取つて其兵糧もあつた其の事として
先づ之れ謀りて引退つてハ其の事として
重し福徳と致りて其の事として其の事として
その方百餘斗の事大物つて其の事として福徳
より其の事として其の事として其の事として
其の事として其の事として其の事として其の事として

くま首ハ丸九帝ヨリ名モね又ヨリと表れ
軍ハと方に石回小西打負出同十月初吉集
り由江歩といひうく徳ハ人教を返し道を
化せ列もろをき用主しり宮宮と元を
是を歩けしや今と味方に成し長首子の
城よりるとお百勝斗歩兵二子あり由江
打てかりける會津方急敗北し逃打よ
うるをり教と志しを安よと泉し水紀下

よ友阿大膳と尸と只軍人衣印の者よりし
大將の前よ進りけりお初物よ大城ましけしとく
川ハ甲く會津と川を事けり安安を友
集討死は味方をれせ下しりるより下り
かると取しりると小塚の物もあつる行徳命
急場入道と外に五人同討返しつりしと同
物よとあけて逃返す押する敵はしよ驚り
あふありかりとあともとらる大おかき所

領藩にいぬおに人たれあさしめ切
かり大勢の向ふも江移東よりつてあるら
このころも幕下よりすあさしめ江に生あしめ
是後大將は後陣をうけて流して一撃に後陣
をうち打ちけしはうまをとりむり
ゆるも敗軍れ智言城の城より一車丹波
以下の意味方少と志しせしを捨てて教しめ
成て後陣の小荷詰をうも大勢をうせ

あしめ幕下は後陣をうり

一 曰 秘云右の二戦のち所せお遺しつる政宗
の白名を攻落す八月の末に山縣の戦十月初に
一 一 二 度三河を反景勝の向いしを却てあしめ
其介松平伊豆も江に膳下依竹景勝と
あさしめあしめも景勝依竹も江とあしめ
一 二 三 度四府公のとりは後二度ともなはあさ
しめ及景勝の豊野をうしめしめあしめ

とたり也江表と、働といふも利あくし
河赤と方れ石田敷のる味方各いし
白川表の人心救といかへて我とすといふも
三河も後景勝よりしつらふもわらう
一 勢勝も抑さしよあしすといへ意うて
河もたしあし

一 河府公文津よ三日し滞あり時三早きよ
しりたるお坂の岡を塞ふし河の
河者

河の赤の其の福徳を其の
時休えよりよも刊記方より言高院後
の河府の心を其の事と使者福徳其使を
同方志くといふ陣へあし時休の者三人れが
右入の法度多しといしあし多しといふ
系は後多れといふあはるよあしりといふ
か産のたしといふ河赤河赤の元赤の
うけ通り福徳よ進つていす河赤河赤

是ハ仇れ三人のかや其と逢通るるを
海一とて受け右れ仗の元版立て福澤
刑部ハ内府様縁色もし其とて其
まんとしつて通一なる愛つて其
通り福澤一を頼とてしと決り
持母しあきしる其持け者れ改め
血流けぬぬまの世のぬぬし右れ仗
て之の子細し達ハ男ふふぬる切版
と

して則自書は其あまいしり且ハ使れ
唯唯おぬは内府へ切版させん
な多汰波村の茂助とて切版の
し進首とてえせらるる内府様
無し其書同んれ内府様とて
二人を切版して其後
大坂へ入るる福澤を頼
れおぬる書改め書切版

と申入秀忠公御外果さすは思ふに此
に述まんと依後者方の花にぬ大坂に此
後と及の忠功を福澤左馬次清野左京と
又申しこれに被補判形をすくらし
威勢たらしめしは福澤右左衛門
尸ありてこの節は股を飛へる事
切腹下は身に入は事いへる事と
此の節は丹守多助と申すは及福澤

之陣は大敵と減し粉骨忠を以て其
如友より清野左京以下毎二れ一味大
名教多し人少し是れと云ふ事
福澤親氣人といふ事と申すは
其と縁をいふ事と申すは
只是れゆへに腹切の儀は
しる事と申すは縁相授りし事
及申す事と申すは切腹は伊集

を其方より箱入福徳と送交す所
則首を返し一冊陣入れよ其部より
のち及部とは合偏さ度其成交を
も収るししはる秀忠公の書
もさるししはる福徳と送交す所
後徳と送交す所

此の書は... 徳と送交す所

一政公の書は... 徳と送交す所
城と取捨の事城の中人其備後より
旗本とて... 徳と送交す所
其國持せし合を... 徳と送交す所
其情なる... 徳と送交す所
城を... 徳と送交す所
河内... 徳と送交す所
或は... 徳と送交す所

流も故京よりうけ取り命とまじりて
町中流の福徳喜々も流を福徳とはいふ
ちね藤田と柳と舟と興と主柳川と
河田大坂東丹波以下流に福徳の二里中
隔と瀬のともあり小川と隔と流人を
飯石ととこいふ平浦生るありと
宇都宮の河原に舟と舟と舟と舟と
くくくくくくくくくくくくくくくく

永井信長より久美岡と決意す
と野信長と南越中流は丸市と介家田丸
と流新屋又と流人負累書山田と
以下下流ととととととととととととと
ととととととととととととととととと
ととととととととととととととととと
ととととととととととととととととと
ととととととととととととととととと
ととととととととととととととととと

衆を以て大勢の敵と爲すにたゞはるゝとて
くまを以てしるゝとて人に向ひて是事ありと
皆川を以て政宗に向ふ政宗敵の勢と
すゝく自分進めかつとせり合ひしる言のま
月のさゝおせしるゝのさゝしあつたおと
るらそきいじんをく教ふるゝとてまた百と
初て切むきい成しを口打きとて野守をば
政宗くつらねるるもれもくも死ぬ浪人
流も被侍一人も死にた政宗あひ無く
川中を以てしるゝ合戦を合はる福徳このる敵
此合戦を合はる浪人しつむしとよき御宗
宗なるも御母此類系勝を感し後
た向を被後と改めしるゝ夜を語りし
とや軍人たは福徳の如く相手を振り
けむしをけしるゝとてさゝしるゝとて政宗はと
の敵を退教し福徳城を攻めんとあつても

柳川に在りし許にありしにむしり日余人を
あつて置て即ち陣を拂ひあはせし柳川に
毫も一歩も東に渡らざる者なるは是れ
任人なるは戰場教と云ふ人なりしなり
又安國に名將を導く業は是れなり
あつては名將の功のこのやうに
あつては政家の陣に人を行く
あつては政家の陣に人を行く

りあはけきのかさよあきらと
名將のいふと定らぬは伯父重實
あつて三春城主流頭とあつて
は吾れ由りしに人殺しけあは
兵と合戦をうけあはし隙に攻者
百人にあはせしに陣をうけ
あつてはけきしに陣をうけ
あつては武勇の達者なりしに

臨ふるをくしんくしんは國軍の車後
余のさしは打きたるとして後回方おろく
東丹波の二日膳とお鼻の政宗のおさきれ
人殺し寛くのりり 叔割やういふ其
同り 功者のまゝ百口いふ人おさきし計
と付志のじやりに政宗の陣ゆかひよせ
鉄炮を打こふゆまちとつけ切く入る事
れ侍七八十人做事し 誓お合防つれた

ふ守は六人討死のりりいふあはあはあは
り西村よたあつこのまさはあぬ由おれし
まうり政宗の二日膳お幕さきの獲らぬ
一礼をくし柳川の返りりり政宗の柳川の
是の勢をとてはあきあき川返りり政宗
とらんそふけとしてしは返りり兵糧もく
して先由人味ましてし返りりしてはあは
あはあは福徳を攻らくしよしあはあは情

口市をうつこ言者百勝しつうし大知えどき
彌海も里た日新も夫九ふち知えど
お合旗炮を打ちけり合よ情もあつは
夏としうしき首は夫九りさるる

一 ね又おらと妻の事京勝は白川妻柴固り付
安国と総將津下女も者をも三河も後受も
ふ向けむとて人教を考らるしむは城
あつち將少く春日右妻尉 芋川修理と京にあり

ふよ二り人教し大園は は水系 常陸と軍奉行と

しし山縣は及向幸人吉津か山くし
里やむい城もは山形は十口里を隔り
ふもくははとの山か一働と用意のあふ山の
も身情なぬぬちの城坂井城初瀬きの
城きく口の心城と右城の中か春日
知人の穿人荒城さよ相談し城をの派し
む印方と隠集し戸の由口通よりきれは

むじろふらうらうらふ其圃むじろふらうらうらふ道
と押入るまむまむあつさるを大園とのこ
い可然らとのこらと和洲まの二日路中まをく
しと雞ふらうらうらあつさるやと山形押まをく
か城まの攻あつと枝城は自あつと枝まをく
れまをくまの類しと和洲まをくあつさる
け筋か押まをくあつさるは道まをくあつさる情あつ
押まをく九月まをくあつさる歌城まをくあつさる

湖水を隔くあつさるは水はうけあつさる浅淵を
えよまをくと泉まをくあつさるあつさるあつさる
又城まをくあつさるあつさる中ら路まをくあつさる
と泉まをくあつさるあつさるあつさるあつさる
自身まをくあつさるあつさるあつさるあつさる
大智まをくあつさるあつさるあつさるあつさる
あつさるあつさるあつさるあつさるあつさるあつさる
あつさるあつさるあつさるあつさるあつさるあつさる

後藤氏は諸將押寄せ攻ける城は
小野と那珂の軍は負外別打負討
たむあつたしとく攻入つたけり
方のあちの城坂井の城か
とけりお家れけりおと
大い攻入る金津元是
とわらふ是氣とく進りけり
人常因見次兼塚理直
かとぬり防ぐるる
春日右衛門長言堂
陣を長言堂城は志村
固くお家とく
相換東根常陸
お家人大岡右衛門
ふゆりしとく
兵とせり今く
お家人平打取

志村伊豆元山十人討死同日九日系勝元
権村道酒を降し七百二十人ときつこの心を
攻家城之里入城後をを圍く中しと
との心なるりこの心なるり此兵を
て結しけしり系勝勢中しこの押来
里入と城が出法し此兵起りあふ
窮くこの心なるり此兵起りあふ
道酒道坂を降し七百二十人討

討死同日日申討死又家のが勢重實
小玉大受石川は系勝を来りかりと泉
の元と心を法を初日已に言ふるは此心
夜合戦は系勝が門入の心と此心
人殺を門として大園工敵陣もと泉は
敵の後陣に突くかりし心ある討死元
や首を合系が系討死同日九日
川退長首をかりし心ある大園は溝

たるとまゝの殿してたし徳を合二廿五也
百人徳と来りかり徳と合天業はとま
とせり合ふと討たけしけすく
叶ふし
陣取るに九の敵の戦は
元はも政宗のかぢ元合戦し
徳も負討死とり政宗元はに人討死
とせり

一 徳とまゝの殿してたし徳を合二廿五也
是を聞く徳は
二百斗は
百歩無二三よと押つけ
大膳行田合人
敗軍の智
討死は
敵を防め

伊集の次由利の立山等今津へ味方の
一 兵部新の園由利の立山等今津へ味方の
り一通をといふも皆山形へ送りて一味を
今津迄と進つけしと由利武勇と及のちおれ
しも敗軍のちありしときいふ御り
からの城はしりし下丹波を初めしりしありし
の味方を捨て置くしりし今津へ送りし
一 伊智の若るの城は九鬼大隅と及のちおれ
多羽城の若る子長と及の味方を送りしは
内府公も初め三島も今多集人を送りし

多羽(多)をいふは... 河使をお果し
敵と成子後子長を... 多羽むじし又子義
れ中りし治アも浦お負し... 大陽の城を...
縁者の新宮お彦も... 同... 熊野...
九鬼を切版し果平

一四... 毛利輝元の人数を...
吉備城の... 根兵庫... 掃部助

初... 三百... 九月... 馬助
吉備城... 城を... 馬助
丹の日記... 細... 中... 安達...
等... 使を討果し... 城を...
毛利... 三浦の浦... 同... 細...
三津... 野... 城...
井... 者... 陸...
又城... 同... 者...

ゆくはつり押取を討死城を名川に落ちたるに完なり
為り討死佃は彼城を請ふに退き南國人
子も名も果と云軍人毛打名と味一敵と
川入江家の古城を入けるは友日記三津巻に
出づるも一も敵もか合ふに記と云はる
陣は同九月九日敵は久米如来寺に籠る
日記押取あらんとせむは之陣は向ふ久米
討死敵三津巻活ふりしに退き後園と云

敗北を固くあよりのして引返すと

一日向島の伊東氏アチヌ十月十五
日辛巳大坂と病死子息
ナヤとしを固くあよりのして引返すと
けむは伊東家の軍勢甚だしく打まゝ同
九月ホリ治アぬ浦方より指たると宮浦城を名
巻攻めたる同十月朔日攻めし城は松友
平太夫又子三人英諸卒八十人討らる
それと浪津中野より佐々木の城を押取て攻め

を穆依合意と云は後日ヶ所の介城の流す

一か聖利長ハ大聖寺城を築く後合意ハ

飯沼をりげらゝ家康公へどりの由ぬり也

出陣可きと用意次第終迄待候と云ふり

かゝらるれ兄の命を背くとするは

古方勤王衆と云ふ之誘引をくするは

しと致し公九月十日利長合意ハ出陣を

小松の御殿に在りて家康公

へ後承のる利長と和談あり人質をかり利長

出陣し大津に集意して内府公へ来

合意す

一服後を左回しげらゝ友軍討取内府公承り

関ヶ原合戦の極みの御く関ヶ原の

城をせめんと態をさく来らぬ宇土の

城をたつしる南条之宅をたすこれ

城代ありしは治津方への智を後日ヶ城を

三の石を攻む。薩摩の兵は
能くし、おの三百計ふて、後詰の爲に、代を
出結して、放火を、三計取る、村を、あき
居、叔集人、並、河よ、三百人、活、く、八、代、に、包、む、ぬ、
一、人、を、戦、し、大、將、を、歸、と、討、た、し、あ、い、く、し、
物、の、圓、と、京、の、府、の、所、勝、し、成、る、小、あ、り、城、
後、を、く、侍、を、入、京、を、物、と、と、花、節、を、集、め、し、つ、る
三、斗、次、を、も、も、色、尸、波、ら、れ、た、城、甲、に、

世、由、び、き、し、り、や、あ、ま、と、初、く、小、あ、る、者、候、り
心、下、城、と、活、し、下、城、を、も、も、三、斗、次、城、代、と、入、直
一、立、た、花、節、を、活、ア、も、浦、一、あ、し、て、大、津、の、城、と
あ、る、あ、り、り、り、り、味、を、取、軍、と、び、く、と、あ、り、さ
左、利、へ、池、下、つ、と、筑、後、の、柳、川、の、城、と、新、く、り
湯、指、の、あ、り、ち、と、活、初、を、浦、一、あ、し、て、佐、又、城、と
取、あ、り、り、り、り、り、家、康、公、に、使、を、取、り、り、り、り、

と交治部蒲一速は後悔を了し中け科を
印免許おたりしお下向し之をたを
考るゆへと薩戸山後向し印をたし
はつ侘しははる多許ある能人を進上
早し胆あふ下向し二の人の人取に押あ
るゆへに後分押あ黒田如翠ハ昔にお押あ
るも志たあけきくあ友言中改め改めは
城と流しけるるあ友まを合如康公頼

小所侘ゆるまをるし印免許あ考る如康の
色と懸命の杖を下後ハ心あまをる
印免許武印免感一やわしりあ
一清如翠ハ湯湯存定し薩府の人取を
押ある其間如康公ハ印免許湯湯幸御ハ父子
はる印免ゆるしと言とあてし極はるし由
ら印免許ハあるも通るあはるし由下
此のつれと印免ゆるしああ友ハ後ハ

田中多助の事下筑前を是田甲受るに事下
豊前細川越中、事下、くや九列子均
流りける

一山崎大馬助、名田一味して田部色^の城を
攻めしは細川又より達し、及、
此人の曰る、は田三太夫輝政の味^妹を
くれば、去、七月大坂を細川曰、自、
田三太夫の曰、と三太夫又、

石ころ、ま、し、も利名連、
之、山崎も、し、も、
て、
けり、
三、
あり、
一、
と、

河津とてはとくしと家老並おのり
あはれおのりおはふも御めとあまご
の使とのりせけらと並おとらして此を
もそれ共の守公の御扱え一人入る
使はあはれおはふと古帝の御書と
あはれおのりおはふと御書と
事とと方ふも御書とあはれおのり
あはれおのりおはふと御書と

京勝之祖代への國あはれおのり
河津御書とあはれおのり
あはれおのりおはふと御書と
一揆取北を逃打る意打る同時一揆方へ
あはれおのりおはふと御書と
あはれおのりおはふと御書と
あはれおのりおはふと御書と
あはれおのりおはふと御書と
あはれおのりおはふと御書と
あはれおのりおはふと御書と

又泉と云は、毫一揆も敗軍とて、
一揆も追うけしめは、指すに云は、集
一揆と悉く返教を講じ、
之れ、出陣、次村と周防、
一揆集つて三條の城を、
三條城をめぐり、
方々一揆、

の者、
又雅楽、
けり、
この下、

丹波の村と溝の間にありて今も三条の村

後請にけりて一揆たるとありてやむをいふ

皆川に在る雅楽助三条城の御

一ヶ所同村の城、小倉の御所、若たは毫

けりて同、月野、一揆共、我、い、せ、あ、り、る

小倉の御所、己、居、城、を、い、け、り、る、城、丹、波

板板戸、各、同、二、辰、村、の、地、味、の、千、河、九、里、也

小倉の御所、使、を、い、け、り、る、八、幡、丹、波、を、い、ふ

小倉の御所、使、を、い、け、り、る、八、幡、丹、波、を、い、ふ

小倉の御所、使、を、い、け、り、る、八、幡、丹、波、を、い、ふ

小倉の御所、使、を、い、け、り、る、八、幡、丹、波、を、い、ふ

小倉の御所、使、を、い、け、り、る、八、幡、丹、波、を、い、ふ

小倉の御所、使、を、い、け、り、る、八、幡、丹、波、を、い、ふ

小倉の御所、使、を、い、け、り、る、八、幡、丹、波、を、い、ふ

小倉の御所、使、を、い、け、り、る、八、幡、丹、波、を、い、ふ

小倉の御所、使、を、い、け、り、る、八、幡、丹、波、を、い、ふ

のこりしを敵三百余人討死同時毒をたて回
川入小子を近き一橋堀部一日市川守
陣取ら塘丹後守少兵衛の軍を打勝てしむ
はまたおろしあはれ別押しけし陣は逃
成部守教馬も一橋とせり合ふ
は丹後守自身切くつて逃く追ふし
後陣よりせり一橋のちりと丹後守を力
ありしに敵部あり

一 大將堀久左衛門春日山と土城と堀並物と
そと月と女と女時と柏原清く是物
より一橋のちりと有る由
三条城は堀雅樂助坂元城同丹後守
村と堀村と周防守新田同堀溝口御守
横尾城日沙子同女馬と堀長尾堀尾守
は中丹後守長尾守女人の御は板
群ありしと女ありし河府公ト秀忠公ト

河成出と下

一因霜月寺秀忠公大坂と由りて伝又城

入部十八の所美曰は日新田原に帝 号勢也 徳也

玉とのりてらるゝと交味方右者の人

河國と波下一女藤後後福徳左衛門一掃

磨八比田之左馬一紀伊國八淡野左衛門一

筑前守八尾田早受了一筑後八田守三郎八浦

一彼赤馬作八金吾秀秋一出雲隠後八塘尾

常日一豊前守一豊後守八河川越守

一伯耆中村一角一若狭國八京極守相一丹後

京極修理一左八山田守馬一伊豫松山

加友九一伊豫今張守左波一因晴

守前八比田守中一飛騨守八金森守

丹波福比守馬守善正一丹波守八例徳次

守前八伊勢守八一柳守物

一越前守八三守守秀康公

一 尾張國八下野の忠吉公

一 徳登及小松大聖寺の希田利長

一 同三月より山内若狭と切多野分

招年夏即ち八人諸君より仰付

（Faint bleed-through text)

（Faint bleed-through text)

（Faint bleed-through text)

（Faint bleed-through text)

慶長六^辛年正月元日^庚

（Faint bleed-through text) 紹巴

（Faint bleed-through text) 昌叱

（Faint bleed-through text) 去仍

一 正月の府殿の事より御免の事也

一 十日諸人等也

（Faint bleed-through text) 和後の日宛事より

（Faint bleed-through text) 今と治事より舟に押さるる事

二月城之石

江別佐和山 十八万石

井原守部

同列大津之摺田(後)

戸田九門

三万石を以て初子石を以て同よりはのりたるいかに感と云

摺田赤坂 十万石

比多中書

濱見加納 十万石

奥平守代守

三万石

比多普之俊

同吉良 三万石

比多信友助

同吉田 二万石

比多吉蕃助

遠別濱松 二万石

比多九馬丞

世回、比多守内膳、比多守と書付置りしにあやゆりし
心算内膳の御京より其年自害と云

同懸川 二万石

比多隠波守

同横濱賀 二万石

大津賀出羽守

上の麻橋三万石酒井河守重忠

酒井備後守

後忍府守 二万石

日坂之左衛門

同與國寺 一万石

天野之節守

同三投揚 一子子石

久保次郎

と総小敷 又子石

千多由美子

一 三月廿二日同府抄身大坂代見 同府移

同亦四日中納言 授秀忠公同出見 同後 亦

同亦七日中納言 授河上治

一 亦八日中納言 授大納言 同河神任

同亦九日 亦 同下野 亦 授侍從 同河神任

河童名福招九授 同亦中納言 授一服 亦

亦 亦 亦 亦 亦

一 大坂 亦 秀頼 授 亦 在 城 亦 同 府 祿 元 五 亦

由 亦 亦 亦

三月十日大納言 授 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

友 亦 大 納 言 授 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

同 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

同 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or header.

一 保科彈正死遠城ハ子肥後ヨリ平甚クハ

修理トシム

同月廿八日所部備中守 大書頭ハ信守

七月初日景勝會津ト立同月廿日信貞ト共

六月常陸同部三万石ヲ周防守并領

同廿六日會津ハ信守信文郡坂田郡ト内知行

亦石石下ム

同日會津ト郡 石石蒲生及三郡ニ移シテ後日

遊軍ヨリシム

一 九月廿日大納言秀忠攝江戶ト所歸

同日板倉ト市左馬加友在在馬 京都ハ所司代

年録ニ二月ヨリ今ニ至ルニテ無所司代云

一 九月廿二日無所司代

一 九月廿六日所司代ト信守信文ト人知リ汝領

手録ニ同月所司代

一 伊達政宗ト武列久森城ト喜多場トト下

一 同月廿八日如賀羽柴肥前守息女大凡及大納言

息女ト嫁入所野所司代ト信守

一 十月十日府極代又ヨリ所司代ト河下向

一 青首江戶の所長青月九日川越の所喜遊ゆけ出

き一節を向うの之色

一 同三月二日江戸の小事有年録云所中焼云云

三月廿八日宇都文と十石不奥年大徳寺家網

お似蒲生也

一 山門の三子石豊國明神のつる石をちりて家進

又内裏の儀よりよきと京と色をあらう

一 神宮の吉田殿は又子よ萩原津紙大副兼雄

毎月十八日音楽とて神楽年録曰又内裏之北頃方ニアリレラ
京迄遊一寄ラレ云云

一 高野此衆流学侶より人公事とて本食と人れ

奥の石田一味を相果し其以又珠院本食の

せりありて日府探所赤張のる本食法とて其

一 同三月二日江戸九市大徳寺年録曰是行人ノ類トリ云云

斗法由

一 菅沼小大膳等より一々其年亦七を中取りより

月法知り本流友并の隠指はるるといふ

と夜露靡もあひ泣け恐城のよる小大勝
 一 戸の付の隙飛ひし一^箇家来れ者とも多法渡其外
 一 方へ心のけぬ一固老姉よい知ぬ俄恐津の文
 一 ちぬの不用意いぬ又ぬ急城の家来れ其汁之
 一 恐城の身と可もぬなるも、陸のサも後
 一 ぬ果しぬ

慶長七年元日まき号

一 奥子入の出来ぬいぬるは梅

初縁のあふるまはるる

春のよの曉のくさきさき

一 正月六日院系内府様位一位所昇進の由

一 同月廿五日幕下延此小見川一万石洋紙

一 正月廿九日内府様御座り所と洛伊勢路の洛

一 二月二日より縁倉病息ハ情宮所建之此初

一 と思存り者其坂刑部^{元正}江原付是

一 去野合戦の時河とつと河立願とよふ

河津堂の神意の旨し知れず
長坂利於正ののりて同月行
と家つてし

一 加賀の肥前国東へ下向の府掾のま
江戸の口を四打に戸をさ出は日意しと
二月廿二日江戸へ参上はしりしと京
徳大名園東下向せ用はし兼りしと出
肥前守の母を對面室と洛を大納言松

一 此は仔細の事と流しし一は出見の對顔
一 二月廿二日江戸の浦へ参上はしりしと京
右邊の事記す下を二年の合戦に被成生
心ん子金はしりしは此の症記の事
一 二月廿二日江戸の府掾の事
一 悉く城及沼の大膳に下向する家来と先
き一其の事しる事しりし大膳子

記ふ之者らよ、ハ相子指し候也、也西日美^ハの事也

是并伊賀石野刺^{ナリ}之、ナリ河府掾^ハ取^ル之^事あり

則^チ出^ル一^ノ女^ハ心^ハ毒^ハは^レた^事あり

甚^クな^事は^レる^事也、ハ江^ノ月^ノ同^シみ^人を^見思^ハレ

素^クな^事は^レる^事也、ハ石^ノ懸^ハを^可し^誓也^事也

伊達政宗^ハ果^シて^宮城^部と^言ふ^事也

三月七日^{長編}若^ク敷^{手録}内^事也、ナリ河^ノ延^生の^事也

三月十日^{手録}將軍^ノ校^ノ為^事也、ナリ大^ノ坂^ノ河^ノ下^ノ向^ノ也

河^ノ對^面と^言ふ^事也、ナリ也

三月十日^{依名}津^ノ龍^ノ伯^{義久}の^事也、ナリ事^ノノ^事也

大^ノ坂^ノ河^ノと^言ふ^事也、ナリ也

卯^ノ月^ハ白^ク出^見と^言ふ^事也、ナリ也

二月^ノ日^ヲ將^軍掾^ノ河^ノ事^也、ナリ也

二^ノ条^ノ河^ノ城^ノ河^ノ事^也、ナリ也

河^ノ事^也、ナリ也

二^ノ条^ノ河^ノ事^也、ナリ也

一 六月廿日 伊予より 土多依波より 大原相換り 抄年

手録
松平直能守

周防より 下大勢と 引率して 同日 常陸國

三石より 出陣して 土多依波 大原 相換り 別同

十日 依竹居城 常陸國 水戸城 亦 諸取

り 色し 依竹 相換り 大原 相換り 通りは 色等

一 伊予 秋田若城 手録
城川渡有之

一 水戸城より 抄年 周防より 土多依波より 去 諸の 景勝

軍人 依竹 軍人 秋田 軍人 土多 依波 諸を 依竹

元北 河より 土多 依波より 土多 依波より

東丹波 子息 土多 依波 父子 二人 景勝 亦 諸を 土多 依波

父 景勝 亦 諸を 土多 依波 父子 二人 景勝 亦 諸を 土多 依波

軍人 依竹 軍人 秋田 軍人 土多 依波 諸を 依竹

東より 亦 土多 依波 父子 二人 景勝 亦 諸を 土多 依波

と 軍人 依竹 軍人 秋田 軍人 土多 依波 諸を 依竹

お 諸を 依竹 軍人 秋田 軍人 土多 依波 諸を 依竹

起り 抄年 周防より 土多 依波より 大原 相換り 抄年

いふの昔はよき事なくは周防も百姓も人質
をとりしるはしるはしるはしるはしるはしるは
りしるはしるはしるはしるはしるはしるは
近衛一犬将分のとれ大なるは馬場覚宗も下
生捕は東丹波のしるはしるはしるはしるはしるは
周防もそれ案内者も主宗女もしるはしるはしるは
すしるはしるはしるはしるはしるはしるはしるは
いふしるはしるはしるはしるはしるはしるは

是も其れ初めしるはしるはしるはしるはしるは
如故なりしるはしるはしるはしるはしるは

一 岩城守石守原左京右衛門尉義直は討死に
たふすと申言原左衛門尉義直は討死にたふすと
申言あつしるはしるはしるはしるはしるは

一 六月甲辰日農ノノと来りし唐人も昔人
れしるはしるはしるはしるはしるはしるは

一 今手付文庫は金澤文庫之書物は六月に日比安插し学校寮に於
八月と句より出又事し河内唐原守義直同は九日
文庫書籍帳を書則寮に大納言原守義直見河内唐原守義直

一 四年七月廿一日、父家、女、三河、乃、在、城、也、
の、母、大、島、を、交、へ、り、人、の、名、女、之、將、軍、源、頼、朝、
の、慈、傳、に、在、り、い、は、江、戶、の、下、一、小、石、川、の、寺、
に、て、お、さ、り、れ、い、は、女、の、一、は、是、之、右、の、山、川、
傳、通、院、の、淨、土、京、中、興、下、了、樂、言、と、人、稱、の、用、
奉、れ、寺、之、始、も、先、子、の、代、の、當、國、南、宗、祖、世、也、
又、後、學、道、能、化、と、さ、き、物、中、天、正、十、八、年、小、田、原、
陣、の、時、八、王、寺、節、より、と、る、歌、軍、等、礼、入、り、

い、は、寺、の、ま、ま、の、焼、拂、し、る、は、け、寺、之、下、と、
成、り、寺、の、門、前、の、意、光、店、宗、圓、店、と、寺、家、
し、て、ち、き、り、た、り、き、り、の、殘、寺、の、形、と、り、ら、
し、中、の、如、く、南、河、代、の、打、入、の、後、の、寺、跡、に、
ら、如、河、代、の、在、意、心、か、き、り、を、河、建、之、と、
河、袋、塚、の、山、音、提、り、し、り、た、り、の、後、に、宗、教、
の、如、く、
一 亦、日、法、見、より、河、骨、と、の、樂、り、し、り、下、一、水、野、

日向寺に於て改修す下は二門流を修す九月廿二日
江戸下平向同寺廿日小石川に寺を出入同廿八日
小石川大塚に於て改修す九月廿二日西に修す
とされより口より北とあいに改修すたてられ
大塚にまゝいさやきつら水引の赤坂今日潤也
口よりいさやき今日潤天のいと同父もよま
きやまてさういさやきつら口十八日ふふれんけ
日光月光寺外更築つらり凡道代玉双にけ

そらまゝいし河道原ハ人源美言と人源美言通院殿

光岳容譽知香大禪定尼

波寺にて口十八日此ら法事と人写大念佛

本日の諸寺誦經有

九月 杉平下迄も忠明の二見作子と下是

之祖代これ女也やわらりりり也

十月二日河府候江戸口下向け教皇是心書修松

河寺口下向け修松

一 十月十八日今日書中問言殿 秀秋 死去二十八日此

年録係十一日

大酒石酒犯... 人を切殺事教... 知

予一乱... 子... 女... 知

家来元平... 牛... 林丹波... 稲葉... 内通

村... 其... 元... 府... 持... 知

二月十日... 津又八... 住... 為... 治... 内府... 知

每... 大坂... 知

龍伯可... 治... 内府... 知

予... 庫... 石... 同... 味... 危... 心... 死... 又... 八... 知

取持... 福... 知

運送... 知

十月十七日... 知

二月十六日... 内府... 知

同月十八日... 知

初... 知

皆... 知

三月... 知

年報於國之原... 知

井... 知

信吉... 知

掛ひとして火しりかき

同書有る所の様は之の如く同書に載るるを以て其の如く記す

大分治時又八世之と出仕しぬるに治時八年

秀家降参りて治時亦隠居しぬる

所之治時成敗は下りぬるに早し

れ不せ下りぬるに早し

三月廿六日細言振沙野野之田浦に

伏竹義宣秋田に打入りぬるに秋田は古民

宰人一揆と記しぬるに一揆もす

安アハ貞任より心来秋田城に命と代り

茶は善代のもや伏竹友ハ貞任ハ敵作と入道友

子と新羅三帝友ハ子孫也然ハ我善代ハ此之

の敵節ありとす一揆と催しぬるに伏竹流ハ

伏竹友ハ松久事とぬるに之を頼むハ難成

志ありとす一揆は善一系と関分一味同心志

合はれ城ハ義宣ハ母と名を攻めて入質

見とらさし一合流を攻ぬ又関分とぬるにけ

えんと合流を攻ぬ古き太田三樂子河波也

伏竹九平録
二巻のうちに押花の年録

梶原景時兄弟一揆とせり合致度は悉致
退治秋田ハ平均日治りし由吉田梶原五人中
横江守城とて一度の軍賞ハ下りしを以
依竹守合意河田守者日横江を治りし由
梶原景時兄弟の事是ハ梶原切運んじりし由
也あふくき所ありとて梶原とてあふくきを
くみぬ故二人がりの事人いふに城あり
系又ふくき下りし由守城四人救あてて徳園

一 武色此園とてなる者ハ集あふくき由
一 依又此河城ハ河馬也元大書二組宛とて三年
醫ハ清仕ハ清衆ハ河城介ハ守と河城
心あふく春日下総守は是ハ若守吉田守
彼友にハニく此園東出方此武色とて仁人
則十市治つたきよの時十市守は中一を
下総守力日所治りし由依又河門此由清仕
河城代元あてて河門春日守力ハ守河門

浦南を仕ゆ又松桂三三遊日旗炮同く在入
 江舟を駕りて是ハ橋多一夢々中子に以て旗炮此
 と子に以て舟を也右所馬と云方昔二番新
 江舟を令り八番より舟を以て舟を以て初是也
 渡色久た也 水野市心 水野出雲守
 阿部使中も 松平信之 徳川家康
 松平石之 水野淨心 徳川家康
 右春日下船より子に白なる下より成跡、河原原

二子石之下松桂三三遊日旗炮同く在入
 慶長八年正月元日戊午
 一祝のてりやを分り古年今年 昌叱
 一祝のてりやを分り古年今年 昌叱
 一祝のてりやを分り古年今年 昌叱
 一月御見事に出は成元日八先大坂秀頼松平
 一祝のてりやを分り古年今年 昌叱
 一祝のてりやを分り古年今年 昌叱
 一祝のてりやを分り古年今年 昌叱

大名元出づる端

一 二日府校下出仕

一 二月二日三日後 秀康 任系議被前中相殿より

同六日次回三太史 徳和園お領森右と手印作美作守 二史化

至ぬは是八人之者中何言治也

三月九日又相言極中書付在付法野史内院卷書之別時服之院卷より

一 四府校心克元ハ政官月日由代心あり初

相子若校より 相子右馬助 安部九馬助

相子豊之前 某回九史 中山右助

系より 相子志麻守 三井九史尉

右ハ元心克元流亦人々取り傳之とハ相此九の

口番波河とハ心より御心門ハ番侍

一 二月十一日府校上征夷大將軍源和學女院

別當氏長者所昇進也出づる京より 初後

一人より 女し初より

一 波色山城守 大井大城守 松倉好賢守

相子城守より 下は時任諸大夫

一 頃諸國より江戸下子石一人宛没し者下り

河内國此名有書付河場清光普信

一 老忍久野城を移下大老永尉為國替常陸

下向久野城を舊之久野三市丸也七子あり下

子ありおはし民部吏長手録作三年喧嘩あり果し

不許有る之に事なき子石より一國東よりあり

と夜を過しよ久野宗彦より

同日亦一日將軍校心と治

同日亦日沙系 河内東三日十日休又日河邊

一 廿二日大坂秀頼校心大坂河昇進 手録白紙より河昇進之由使
とてまの山寺陸介上治

一 今年外月八日之夜大坂動 七月三日將軍家河上治同日休又日沙海

一 廿八日秀頼校心大坂言秀忠校心也如松沙江云

大老深相授り河邊源系法野紀伊も河邊清光

手録曰伏見下船中河下向
秀頼校心
姫君七才 河上 在系と馬 産月

一 分十目若君本彦校心誕生 長福校心一腹也

此より心より腹心養子

一 今年より女のおぶき諸國よりくるは
おまよりしちまもまれの佐渡と浪系へ出
ちしるし初法人はとておまより能成法金
女のおぶき江戸の名人れのおぶき来り
右大将の殿とて使さしつゝおまよりと
法人の威

一 八月浪田秀家父子は薩摩よりとて去
波河と系
八丈の配流女子におまより大綱を利長取
りし

年録曰大綱言波河

一 九月青水産れは心方授けは界在し
お軍役右大将の心慈傷所法名淨道院殿
英譽大禪定門に奉申しし
おまより信吉よりおまより秋山平千
おまより武田とておまよりおまより
おまより飛浮殿おまよりおまより
一 十月七日右大将の心昇進
一 十一月二日右大将の心昇進

一 本長福抄ニヤ おる抄に常陸少将の進
川中將を以て竹松抄に進後と総介忠輝ニヤ川
中將の事と云ふ所同き事なりとも同付と云後及び
同川中將道所跡を去る十二京所人十人組と
云ふ事を初

一 同月中村一角古方 武部少輔子家老古方 横田
曰信と云ふものとも同付なりと云後云と用
子新はよの曰信と一角及び口切し其れ入信

一 又て後長れり大塔切てかりよの曰信
照る事よて相戦六人切せよ其場めく
よれよの曰信と云ふ事と云しこ柳守の事と云
よ下曰信は安と云はる中村の事と云
教目せよよの柳守と云ふ事と云法達考よて
切て出子柄と振よの一角と云ふ事と云
出言れよの堀尾山城方と云塔と云後及
横田源者子共まてよの事討死出と云け

家と境と

二月夜大將増より一冊の契り長重なる事

らるる常陸國古波より一冊の契り長重なる事

小松より下向志く江戸を、幽居より長重なる事

河感より一冊の契り長重なる事

三月二日川越沙魯野

初倉右衛門同七太夫お露なる事

長九辰年

正月朔日壬子大雪八日大寒乃り人々急

多し

正月日学校第松貞親政要点と後日者より油又と第相、その

正月廿日おる伊凡河津奇なる事

正月廿日おる伊凡河津奇なる事

正月廿日おる伊凡河津奇なる事

夜の明なき春

月よ吹風れさうちあつまつて

右右顔

二月十九日大河新江なり望三日月廿日見入河お説也

河まこは入馬手解

三月朔將軍校江戶公心とつて同七日あり

所湯治二月九日成之、所是

卯月廿日故前三河柳園東に下向右方將領の足并之四年也

六月七日下野子忠吉校湯治よりこゝへて後

宮城校 六月十日右大将校入洛同公心とつて

七月朔日休和山城を去根に板番清平に自

七月廿七日辰右大将校此の番校法并使前度

中息大坂溪心赤れ心妹の若 沙平産

河内卦  習坎也天下諸人大交也

竹矢代極是也是只の事にあらず深倉八情宮

所建立此の事の中核此の事の中核也

八月十日舊法成然 遷宮日也

備八情宮此の靈感 遷宮後正徳六年

同八月十日曾將軍校出見より江戸下向

是所古房校 中二年此の法事也

竹子代校心誕生此の法事也

道中心也

一 若君次口説に於て河普代元流松（浮）此時
たゞて若君の口説所有く（若君）右方たれ
例日て嚴重に儀或也物と牧野大馬元（信河上）
右に二夜よて心なはけ人交長を奉る（信河上）富幸
家軍法をわたりしん（信河上）あつたよ
いつそは自られぬ大御（信河上）もあつた
又年々もたつたよと（信河上）及れ口説に儀式（信河上）
百家の古も元は行名し（信河上）病妻の心と（信河上）あま

子と波河もあつたよ（信河上）若君の教
入心説れ口説たよ（信河上）あま（信河上）あつたよ
親古も元是を取付（信河上）満足し（信河上）落後儀（信河上）
則大胡（信河上）子細（信河上）後隠居は（信河上）あつたよ（信河上）
心も（信河上）隠居儀（信河上）
八月廿四日説忘度衆

松平大馬元
松平早雲

松平安房
西ヶ島

孫六（信河上）

招平之後

如多伊勢

杖野渡河

宇之渡河

松平外記

一月八日竹子代極所宮美山王宮

竹子代極所懐寺水野勘八門村三田友

高十丈高九丈

一月酒井宮口浦と忍之渡城おん

Wikipedia: Kan'ei Kōmō, the Japanese Gold Standard

一月之始より松平大膳所僧令若森

唐人二人来朝は將軍次江戶の

後京忌す翌年春まで在京是

之に彼國の書子とて大明朝より

書子とて彼軍切狼藉不可暗計

之始王を建てしめて大明に

國の始より日ちより

と記言たたり流し

八海

以時大聖菴の圓耳お合はして其の佛法
のせんさくして免後世に苦しむ

一月代官を言ひて其の多きこと二歳大所西家の人

十月廿六日大御言振忌、所為野門口の忍の蕨

浦和十月十日還所

十一月廿日お所城所往有

(Faint bleed-through text from the reverse side)

慶長十一年の正月九日甲申將軍家為と洛江戸所立

淋病氣故發存、翌所澤名二月六日、庚戌所立同十

九日、見の所着正月十日於大坂在哉長年、

見物之者多し然所、大藏平之通知子當時

鼓ノと手人ニヲカレ胸ヲ打テ血ヲ吐三月廿日沈死

正月末ハ暖氣二月之旬昔、岸中ニモ十三日頃

打リキニ度、大霜、其由為之、調二月中雨云々

降ホ五ハ成尅雷女動但當春初其夜半ニ雷鳴

十九日甲子雨廿二日雨廿八日雨二月廿日、己

本寺得家、立江戸と洛十八日可有出張し、交歩

續文兩故如母國、大河取橋、其行旅ハ

先陣

館城 柳永部大浦 佐野修理大吏 仙石越前守信列公室ノ

同深志ノ 石川善次 二番

同深志ノ 羽柴越前守

三番

同 羽柴左馬督 溝口伯耆守

四番

信列公室ノ 宇田右之丞信列公室ノ 額宿因幡守同 佐野修理大吏同

鳥居部 鳥居元忠

五番

長尾景勝也 津中四言

六番

長尾景勝也 羽柴越前守

七番

上総小田喜ノ 本多忠実守信列公室ノ 小栗左衛門守上総ノ位 柳下右衛門

八番

小田原 本多利根守信列公室ノ 皆川忠正江戸ノ位 本多康元守

九番

岩手ノ 石川力左衛門 水野市正とらふ令江戸ノ位 清野景女 同 内膳

上方永合江ノ下

湯宿信濃守

甲斐人

子持小美

世間右大将公所通り
法炮奉行

金ノコイ 江ノ下
六丁 版部石見守

同 三枝松守

同 赤川守

同 尾代守

同 版部中

同 菅原守

同 甲斐守

弓奉行

三右衛門
菅原守 久永源守

三右衛門 吉山守

三右衛門 佐持守

三右衛門 倉持守

法奉行

同

同 近右守

同 初代守

同 宗物守

同 引馬

同 持道具守

同 法炮

同 右大将守

同 榊筒

同 長刀

同 右大将守

同 宗物守

同 法持守

同 茶番守

同 長谷川守

同 小姓衆

同 菅原守

同 使番守

古記

同 大青丸 大島民部

同 二条守

同 柴田守

同 右近守

同 水野守

同 川原守

同 上杉守

同 菅原守

同 津島守

同 西尾守

同 戸田守

同 須賀守

同 津島守

同 村山守

同 源氏守

同 柴田守

同 阿部守

同 山崎守

同 津田守

同 服部守

同 小出守

同 水野守

同 吉田守

同 水野守

同 山田守

同 水送守

同 菅原守

同 水野守

同 水野守

好漢波等 又善堂多事奉り同歩行者 兼小者

山田多事 山田多事

馬と浪地奉り 石川多事 山田多事

同多事 山田多事 山田多事 山田多事

同長刀同鏡多事 山田多事 山田多事

同棒多事 山田多事

後陣 一書 酒井宮内少輔 牧野波河

山田多事 山田多事 山田多事 山田多事

三書 山田多事 山田多事 山田多事

二書 山田多事 山田多事

六書 山田多事 七書 山田多事 信甲衆

山田多事 山田多事 山田多事 山田多事

山田多事

山田多事 山田多事 山田多事 山田多事

山田多事 山田多事 山田多事 山田多事

山田多事 山田多事 山田多事 山田多事

山田多事 山田多事 山田多事 山田多事

山田多事 山田多事 山田多事 山田多事

夕一

山田多事 山田多事 山田多事 山田多事

法炮子挺子 音法 法子 長刀 百 擗箱 音

一 卅年相國寺ノ法華堂建立之是久坂ノ自秀頼公
一 万五子石依合力之

一 二月廿一 北 右大將康公ノ陣後陣危固ノ其
右大將秀忠公ノ陣向是ハ其ノ年ニ被任右大將
之ヲ賀被申所也

一 四月与 羽葉此示 北回主 上洛安子大九同道則
前將軍家康公ノ本江大九進上物合子可取如賀

羽二重之百端小袖ノ其 自家康公ノ服見下
大將秀忠公ノ大凡此進物合子可取如賀羽二重

一 二月端小袖百ノ同此示 進物合子可取如賀羽二重
三 百端之自右大將大凡ノ刀服見下也 此示家老也

一 右大將 有所遺進物合子細也 世大凡秀忠公年ノ
此示ハ飯田大凡在也

一 四月廿日右大將秀忠公合森法平而所成世法平
于時家康公所氣相一人也其咳古同此示而右
教家ノ會此細部高代其ノ得ノ所也

一 去二月 而無之大方之ハ二日ハ詳ノ

一 同八 王 家康公所上洛同十ノ其内秀康卿中
細言ノ所補任同上ノ其類公右大凡之補任ナリ

西家康徳之曰所破上古。夜中右方將秀忠公有

將軍宣下其時。着座。公家役人

劫使。廣橋中四言為階

西洞院女納言時直

系江奇。小河路城女中辨俊昌

吉使。源。康徳

王生官替。小槻孝亮

大外記。中系師生

同日下野守殿左女將上総守殿右女將口浦任上。

自如入將軍家印上落

六月廿二兩月節。雷二三度。風アラク寒云

六月廿三日遠別波河大水。將田系全押返。自如時

所川。成。同。討。東。將田。河。立

六月廿四日。當將軍御系内征夷將軍。收。也。去。甲

可有系内。由。以。打。續。面。如。及。無。日

六月廿五日。當官位内大臣。正二位。淳和院。引。為。征夷。大將軍。牛

車。之。官。首。也。新將軍進物。銀子。千。枚。也。其。好。公。家

所。行。為。小。細。馬。山。多。送。し

六月廿七日。新將軍家。口。系。賀。及。晚。也。之。曰。所。破

六月朔日。諸大名。流。沙。濱。有。上。方。大。名。者

臨川の如進と所養代衆者其の如後馬鹿ハ
人後三白丈也因三日月日能休之河能能有之初
日ハ座立人三日月ハ觀世今春迄也家康公月之ヤ
クテヨリ所之物無補能クハ其其クハ所之ヨリ被
流能其同遠能ハ能所流下カハ能同古更ヨリ
申同ハ家康公ヨリ京之高基院能ク頼秀頼代
之ハ所出上洛下能ハハ同意被作流能
其能其達而能其必者親子者ハ自當可有由被
作同ハ下民同事ハ斜能物運送之人ハ心
ハ其能其頼能之也ヨリ事ハ能勿能ハ由能其能ハ
ハ其能其能ハ能通

一 當將軍家所内流ノ小者ハ大所新被能ノ小者其
江戸ハ其意能有之双方二三人出合能其能其負
死人能多クハ

一 上ハ將軍家為所名代上能分友古藏大坂所能
能ハハ秀頼能氣ハ斜則能之也被能
一 今度上洛能奉之同東元能信將軍家ハ作之

去リ思ハ下同

一 去日將軍家同東下向能日其而能其能能
給

一 十六日 諸國洪水 昨日雨然 元瀑口

一 十七日 新山 十八日 赤名 十九日 有違也

一 廿日 清須 著所 清次 旨 違 有テ 廿二日 雨降

一 能育ク 廿三日 迄 迄 今日ヨリ 使晴

一 廿六日 清須 有 喧嘩 一 四月 以前 小者ヲ 打擲

一 廿九日 清須 有 喧嘩 一 四月 以前 小者ヲ 打擲

一 小者 被 打ケル 者ハ 小身者 至 名字 分明 又 知 小人

一 在ケルカ 彼 左ヲ 助津 治 口 行ケル 故 路ヲ 待 請

一 小人 者 打 出 左 馬ヲ 打 左 馬 借ノ 者 甚 三 人 踏

一 小者 被 打ケル 者ハ 小身者 至 名字 分明 又 知 小人

一 在ケルカ 彼 左ヲ 助津 治 口 行ケル 故 路ヲ 待 請

一 小人 者 打 出 左 馬ヲ 打 左 馬 借ノ 者 甚 三 人 踏

一 小者 被 打ケル 者ハ 小身者 至 名字 分明 又 知 小人

一 在ケルカ 彼 左ヲ 助津 治 口 行ケル 故 路ヲ 待 請

一 小人 者 打 出 左 馬ヲ 打 左 馬 借ノ 者 甚 三 人 踏

一 小者 被 打ケル 者ハ 小身者 至 名字 分明 又 知 小人

一 在ケルカ 彼 左ヲ 助津 治 口 行ケル 故 路ヲ 待 請

一 小人 者 打 出 左 馬ヲ 打 左 馬 借ノ 者 甚 三 人 踏

一 小者 被 打ケル 者ハ 小身者 至 名字 分明 又 知 小人

京親類夕ニ同左京親父此ナリハ信列を同桐抱
 夕ニニ度ノ成敗可有之由自左京信列云送然
 信列妻女ニモ親類夕ニ同テ今抱置其後是此
 可有成敗之由云送ニ如何云ハヤラニ爾落之由
 返是云ハ依之左京腹之甚ク自身幣列津江行
 可相果ニ昔思立行云ハ折節信列為高馬然
 下ニ家ノ年等出合何トハ仰来誠心之誠由
 甲知ニ是是此令同道相上リ於大津急取腰ノ力
 如國人ノノ代見口召連於彼彼其可及于女ノ如
 六 各令異見家康公ハ令言と右府公ハ隠共同前向
 將軍ニ可言上由日間六月十日。依是ナリニ関東ニ
 西人死ニ下向ク六月日ニ秀吉公武列江戸著落
 一 去五月十日ヨリ雨ノ降天早懸下民患甚来
 至極也當春日日本國ノ船ルスレトキニヤム口ハ為賣買
 渡海ノ事ニ如何ニタリケン一艘モヲ帰右ノ船或ハ
 岩ニ當破損或ハ喧嘩ナメ殺殺害ニ又鳥取
 賊宝波鳴ノノ軍亦殺シケル云又去々年ニケ
 レスト云如ノ者モ思船ヲ押取ケル如江日高船
 冬令高買過分得利似朝ノ船去スルニ西ニ
 子下ト云所ニテ事是ハ京ノ夕テウリノ拮据

屋道園上之者也。京師人羨之。而春躬多遺
之。ト云。高、晚伏又夕立。雨甚。京都ハ不降
也。年モ不降。行テ。播州小屋ノ水。水ノ急モ死。但
去年ノ程ニハ。並之。去月廿三日ノ以後。雨不降。諸
國旱魃甚之。六月廿八日。夜半雨。フ。火ノ向ノ夕
立也。

一 七月朔日未申。魁夕立。雨甚。二日酉。魁。夕立。
子。魁。夕立。降。三。川。國。ハ。廿。之。テ。無。損。テ。成。

一 入。晚。右。方。府。家。康。公。伏。是。西。ノ。九。日。所。移。也。凡

一 屋。取。也。甘。テ。如。也。セ。ハ。四。日。就。也。ハ。初。二。ハ。觀。也。行。之。後。一。日。ハ

日吉梅若。八。更。修。也。地。人。ハ。丹。波。猿。樂。也。九。日。ハ
晚。ヨリ。地。産。也。雨。但。村。立。ノ。コ。ト。ク。也。

一 夏。播。州。小。屋。ノ。水。如。去。年。テ。難。氏。又。死。

一 七月廿日。夏。儂。尾。張。伊。勢。近。江。各。川。出。水。伏。也。

京。ハ。カ。モ。テ。水。出。大。岡。東。モ。水。出。名。出。口。川。ノ。堤

西。モ。二。ノ。所。東。モ。二。ノ。所。切。方。播。州。水。入。大。播。州。下。モ

塘。切。音。頃。江。水。入。三。十。年。心。生。ノ。水。ノ。由。云。也。但

本。曾。川。ハ。寸。之。テ。有。出。三。川。子。フ。ノ。水。流。井。堤。切

所。水。入。水。損

一 此の象康公所と洛城之屋形造作の間其の
可有在之也

一 此二之の河川を以て可放通す

河津の堤より上りて是象康公の依仰也彼

河の知行役等其知行百姓人等令普請す

百石の或人百姓の百斛一人也

一 八月十日河東大風大水老人ありて清水上りて

去夏申子魁此年大凶年上りて此水の河東

中一二之と云ふ又十二象康公依仰の故

一 九月十五日右府依仰の三國連下向例或女

一 年之息男兩所依仰之給

一 十月の依仰の雨害の十九の赤坂町の故身

一 十一の稲葉山將有之庚七十六留見羽之平有鹿

二留

一 十二の朝加知の打寄給城普請出来の同波氣

之給及未打の之給清原の河通西の有返り

一 十三日未明の品添の河通

一 十月朔日遠到中象の著所十五日中象は給

十七の渡列田中著給廿二の田中は給廿四の

長崎元河内の城主の管領為平の日未焼の向

為養生令と洛之紀之如色頓死此又成丁去
年八月死之志帝子如房之去也年春死去
也同十八江戶者所十月小上旬より清須野
主腫物煩其後腫氣

二月十七日家康公為野川山恩公出所
二、赤部、雪降事二寸餘寸、於山野臺部
喧嘩有し是昔法ノ論故也

二月二、殿部石見守改易出同野川中
近切救支有、誰人ノ如後、公方ヨリ所

黃金ノ波、武下、出、鞆、二、可、被、下、由、此、中
立候一、尺、露、顯、了、中、然、而、伊、左、兼、藤、島、米、使、

美知ヲ殿ア石見白、是、ヲ、如、仕、了、人、又
カ、ニ、テ、切、申、候、由、令、降、謝、然、は、古、し、近、切、も、大、方

州人、由、諸、人、申、候、改、易、被、仕、身、家、同、テ、而、被、
仰、付、ふ、近、隣、富、田、村、也、ト、し、若、石、列、老、母、ノ

金子ヲ頼リカクシ置候同富田村也切腹公身
此石見守又し時今川茂之ノ時伊賀ヲ去後

河へ下り足軽軍夜迄朝總ノ備毎双ノ切考之
其後家康公へ石見守思半、能トテ何時モ河

先子ノ備毎此類父子二代同心二百人ノ作身

知行三子石人信長如子改改多取 尊了子成
威勢福貴所 錄一近年同心是信 無意也
ニラタリ 理了不盡ノ御氏重リ果而所解如世成
一 世石是守 所領如後ニ百人之同心ハ伊賀
也是皆常ノ所同心 迄頃ニテ伊賀國ノ百姓
侍ノ末也石是守ハ祖父モ其内也然モ早ク中
國ヲ出テ別ニ衆數度ノ言不盡粉骨今衆
ニ成同心ハ別ニ國ニ留リ能ク伊賀先士分ハ信長
ノ名義ウタレ末葉漸ニ強候ニ百姓ハ亦其申候
ニ時分信長生害ノ時伊賀ヲ所通致成候時人
六 質ヲ出テ送り申候其時鹿伏巻ニテ送り候
一 下致作付ノ一ニ所請不果ニ候候其後天下
所必流ノ時分其時所業内申候官田於其
所成半分ナリ申者女ノ致石出候間致伊賀
衆モ衆所奉ニ望申候間所取立可致候候
一 氏鹿伏巻ニテ送り石申罷候候間左様忠告
ニ石出石候奉行同心ニ可致石置由ニ伊賀
一 石出由申候百人衆候向山ノ手ニ屋敷ヲ致
下則殿ア半島ニ所領致成昔ハ世者伊賀ニ
テ日キ國侍モアリモカハ石是先紀ヨリノ傍集

ナリ等情モ可有ぬ今程ハ手前ノ願リノ事
候ニテ家来同前ケツク無情ニカタ之同心此
足申ハ石見殿ハ仔細ニテハ誠ホ走廻リ下ノ
版部之河ハ心ノ象候ヲ心知行被下大
舟ニ為候トテ誠ホ苦ヲイカニ願リノ事行同
心ニ候一ニ向下人投官ニ被下是世念ナリトテ
述憶ニ存河番ノ外ハ石見殿
ツミ同心モウ呼普請申甘トウツキツカ
セカベコトハカセ急浦ツカ合候ヲ若墨候ヲ
ハ申者ニハ扶持方ツツオハナトシテ之ニ急浦ア
タリルハ同同心モ二百人同意ニテ奉行所
月安ヲトテ妻子ツカタツテ候ヲ近所ノ寺
取巻所新詔申下付候者皆打死可仕由
テ弓鉄炮持テ罷在候所公事達上聞石見
江根急浦所産候同同心ヲ可被石放相
海候而同心モ満足仕居出候同二百人ツカ
ツミツテ足程大將衆ニ所付被成候然ハ仔細
衆ノ内同心ノ今度トウリヤウニ孫成候者十人
御高被成候是ハ石見所新詔申候事
ツテ如世則今度ツケテ心願被成候是程

大將。被作付たる原を去る久し源も果敢
申かたき事出等不討し其河切ヲケ國原
江原モアリ事あり人質ニトラレ居出切腹仕
候モアリ事あり桐原候より強二人令々無
程江戸に系カクレ居候ヲ石見聞出人ヨリ
子ラヒ申候に彼者石岡門ノ前ヲ通りケ
ルヲ石見又廿大に收て手打ニセント進懸ケ
サカシニ切腹候ハ一同心ハアラヌトテ伏
通行人ヲ切腹間申合ふ事成所改易被
付付

一 十二月二日 初日所書院書被作付

一 十二月十日 下野守殿所煩志危急自辰打至
午刻 偏如死人然に午越終ニ藥ヲ口甲に入
ぬサテ蘇生成奇持に十日俄に減サテ進
日平愈也

一 將軍家為所警野路ノ景に出門十二月
亦の頃ニテ所進也

一 十一月の夜雪降其日より打續降中ニ江列
大雪深八尺計ト云北國ニ降云ニ及

一 亦亦の右府公自忍川江上ニ還所此日酉

成尅伏又火事出未有馬之善長屋ヨリ出
清野淨正會津飛淨如子飛淨差坂平即
火事係之敬 equal 石見寺板金伊賀寺之同改改
遠小民却家失火具外夕チヨリ可通燒失
一 世度為先王皇進善教山之并寺南都衆徒於
旧表所八講之即經始之由之望之燒禁
中學同照量次第可相始之由之望之燒禁
之如世ト之山衆合之留出仕依之右府
象康之令申之之右府公之又如世曰冬末向後世
式可守ト之

一 二月下旬ヨリ清田の山燒ト多之然之午
正月末ヨリ石燒

一 三月十日南海濱波世時八丈吹ノ色大ニ
一夜ノ中涌出

一 十日ヨリ春寒雪風之

一 世度高懸ヨリ為青信之使來朝專調之事之云

Handwritten text in vertical columns, likely a list or record, written in a cursive style on aged paper. The text is difficult to decipher due to fading and bleed-through from the reverse side.

Small handwritten mark or signature at the bottom center of the page.

